

史料にみる **歴史**

「東京停車場之図」

『東京停車場之図』（埼玉県 鉄道博物館蔵）
〔社会科 中学生の歴史〕p.208掲載

東京駅といえば、1日の平均乗車人員が40万人を超え、JR東日本では新宿、池袋につぐ利用客を有するとともに（2014年度）、日本の鉄道の中心に位置する中央駅である。1896年の第9回帝国会議で可決され、上野と新橋の間に中央停車場が建設されることとなり、東京駅が誕生するが、開業は1914年12月。皇居の正面にあたる、丸の内側につくられた。駅舎は辰野金吾が設計した。鉄骨れんがづくり、3階建ての西洋建築の建物で、およそ6年半の工期をついやして完成した。

当時のこのあたりの町名は永楽町。江戸時代には武家屋敷の建ち並んでいた一帯で、維新後に明治政府が買いあげ、司法省や警視庁、大審院など政府の関連施設のほか、陸軍の兵営や練兵場などがあった。しかし、場末といってもよい場所であり、兵営を郊外に移転させ、土地の再開発が検討された。

1890年に、丸の内の広大な敷地が三菱財閥にはらい下げられて、オフィス街の建設が開始された。岩崎弥之助は 三菱第1号館（1894年、コンドルが設計）を馬場崎町に建て、翌年には2号館、さらに翌々年に3号館を建てた。東京

商工会議所もでき、「三菱村」とよばれた。いずれも近代的なれんがづくりの建物で、馬場崎町は、ロンドンに似た景観をもつとして「一丁倫敦」などとよばれた。

しかし、いぜんとしてあたりは未開発で、「三菱ヶ原」ともよばれる状態であった。こうした地に、中央停車場の建設計画がなされたのである。丸の内はこれ以降、ようやく鉄道の要所となり、日本のビジネスセンターとしての道を歩み始めることになる。

東京駅開業の年は、第一次世界大戦の開戦の年であった。中国の山東半島のドイツ根拠地を攻略し、凱旋する神尾光臣中将が皇居に参内することとなった。神尾は、開業式に合わせて東京駅に到着することになり、当日は品川駅で降り、乗りかえて東京駅にいたり歓迎を受けたという。また、来賓を招いて開業記念式典が開催され、鉄道院総裁の仙石貢や内閣総理大臣の大隈重信らが祝辞を述べた。

もっとも、開業当初は、東京駅の1日の平均乗車人員は5400人ほどといい、丸の内のビジネス街はまだ未完成。壮大な駅舎が建つものの、夜になると周囲は真っ暗といった状況であった。にぎわいをみせるのは、1923年に、東京駅前につくられた「丸ノ内ビルヂング」の役割が大きろう。地上8階、地下1階で、当時、最大のビルであり、「丸ビル」と愛称され、地域の発展を牽引した。三菱合資会社地所部の設計とニューヨークのフラー社の施工によってつくられ、

低層階には商店がはいる商店街を形成し、上の階には企業の事務所のほか、医院、弁護士や会計士の事務所、特許事務所などがはいる、東京の名所となった。

歌謡曲「東京行進曲」（1929年）は、映画の主題歌であり、銀座、浅草、新宿など新旧の東京のさかり場を歌いこむが、二番の歌詞は、「恋の丸ビル あの窓あたり／泣いて文書く 人もある」とされている。丸ビルが、人々の口にのぼったのである。さらに「東京行進曲」は「ラッシュアワーに 拾ったバラを／せめてあの娘の思い出に」と続く。ラッシュアワーが始まったことも、あわせてうかがい知れる。

東京駅の八重洲口が開設されたのは、同じ1929年のことであった。八重洲側にはまだ外堀が残っており、関東大震災の復興期に乗降客が増えたこともあり、開設した。なお、1945年5月25日の東京大空襲で丸の内駅舎は全焼し、その後、2階建てとして復旧し利用されていたが、2012年に丸の内駅舎のドーム、屋根、3階の外壁などを復原した。

図は、網島亀吉によって、1918年にえがかれたものである。空には飛行機や飛行船が飛び、道路では自転車や人力車のほか、自動車が多く走るさまが示されている。さまざまな手段がありつつ、鉄道を軸とした移動の時代であった。通勤や商用のほか、旅行に出かける人々も現れ、この図のなかにも、夫婦連れや家族連れの姿がえがかれている。（日本女子大学 成田龍一）